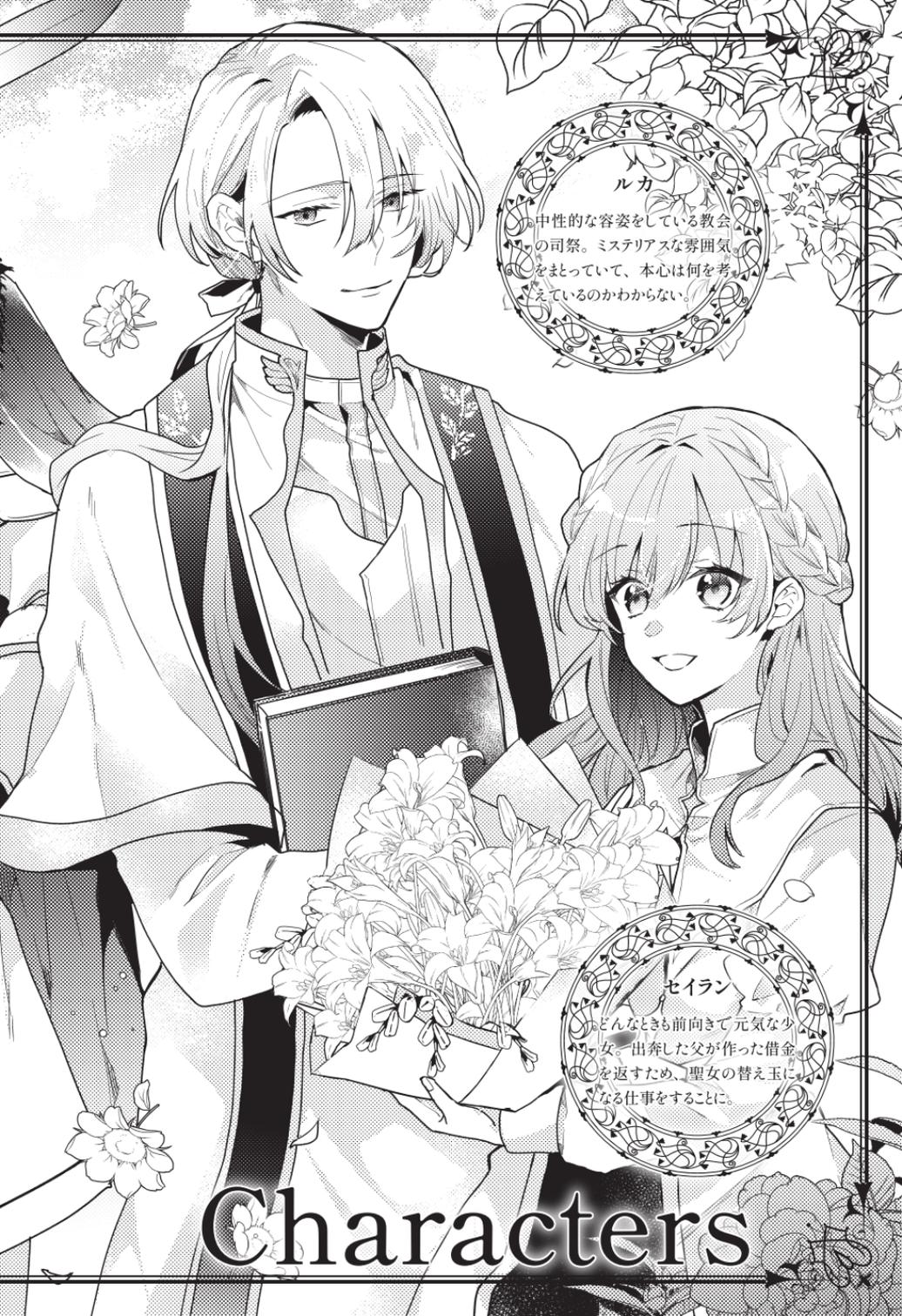


ニセモノ  
本物  
に  
聖女  
が  
過程

担  
ぎ  
上  
げ  
ら  
れ  
る  
ま  
で  
の

そ  
の



ルカ

中性的な容姿をしている教会の司祭。ミステリアスな雰囲気をもっており、本心は何を考えているのかわからない。

セイラン

どんなときも前向きで元気な少女。出奔した父が作った借金を返すため、聖女の替玉になる仕事をすることに。

# Characters



護衛騎士

ダレンの部下の騎士の一人。  
どうやらセイランに疑心を抱いているように……？

ダレン

聖女巡礼の護衛を務める騎士  
団長。大柄な体格で筋力も  
非常に強い。

ファリル

紫の瞳の双子魔術師。  
ウィルとは感覚、魔力を共有  
している。

ウィル

緑の瞳の双子魔術師。  
ファリルとともに幼くして魔術師  
の資格を取得した天才。





ニセモノ聖女が本物に  
担ぎ上げられるまでのその過程

# Contents

プロローグ	『担ぎ上げられただけの田舎娘には荷が重い』	006
第一章	『追い詰められている時に囁かれる甘言は大抵詐欺』	009
第二章	『聖女の代役をするだけの簡単なお仕事です』	018
	『Side：騎士団長』	058
第三章	『遊びといたずらは安全で面白いことが大前提』	073
	『Side：魔術師の双子』	110
第四章	『聖女の肩書きによるブラシーボ効果が万能すぎる』	142
	『Side：司祭の男』	181
第五章	『ニセモノは罪科の炎に焼かれて死すべし』	209
	『Side：司祭の男』	225
第六章	『そんなところに聖女のしるしがあるなんて一生知らなくてよかった』	238
第七章	『悪魔との戦いはリアルホラー体験だったと報告せざるを得ない』	267
エピローグ	『とても恵まれた職場環境だが社畜みが拭えないのは何故だろうか』	301

「セイランさまー。どこにおいでですかー？ セイランさまー」

私を呼ぶ声が教会の長い廊下に響き渡る。

ちよっとそこまで、と言ってこっそり大聖堂を抜け出してわずか五分。私の姿が見えない、と私の大搜索が始まった。

少し一人になりたいと思っただけなのに、大変なことになってしまった。気まずくて逆に顔を出せなくなったので、私はコソコソと物陰に身を縮めて隠れる。

「おねーちゃん！ 僕らを置いてどこにいったの！ 一緒にオヤツ食べようっていったじゃん！」

「トイレにもいないし！ 攫さらわれたのかもよ！ 緊急警報出さないと！」

私の護衛を務めてくれている魔術師の双子も私を探し始めたらしい。

双子が皆に『エマージェンシー！』と騒ぎだしたので、こりやまずいと慌てて隠れていた場所から飛び出した。

「いますいます！ 攫さらわれてません！ ちよっとぼんやりしてて、ごめんね！」

女神様の彫刻の陰から出ると、双子がびよんと飛びついてきた。

「お姉ちゃん！ 心配したよ！ 僕らを置いてどこ行つてたの！」

首にぶら下がるようにして抱き着いてくる二人から、驚きのシンクロ率で非難の声があがる。

「うぐう……。く、苦しいんでちよつと腕を緩めてもらえると……」

この魔術師の双子は、なぜだかよく分からないが私にものごく懐いてくれている。それは有難<sup>ありがた</sup>いのだが、このように一瞬でも姿が見えないと大騒ぎするので、扱いが非常に面倒くさい。

「コラ、ファリル、ウィル。セイラン様が苦しそうだろう。いい加減にしろ」

双子を窘<sup>たじな</sup>めに来てくれたのは、騎士団長さん。一見ものすごくまともそうなのだが……。

「セイラン様、大分お疲れのご様子ですね。ちよつと休憩にしましょう！ さ、どうぞ俺の上にお座りください！」

己の膝をポーンと叩きつつ、嬉<sup>うれ</sup>しそうに空気椅子の体勢に入る騎士団長さん。このように、すきあらば私の椅子になりたがる不審者なのである。

「ダレンこそいい加減にしなよ。誰がそんな筋肉ダルマに座るのさ」

「どう考えても座り心地悪いしキモいじゃん」

キモいキモいことからかう双子と、微動だにしない空気椅子の騎士団長さん。

この三人が、私の護衛として普段そばについていてくれるのだけど、個性が強すぎやしないだろうか。わちゃわちゃと揉める三人の後ろから、新たな人物が声をかけてくる。

「大聖堂にいらっしやらないと思つたら……三人とも遊んでいてはダメですよ。セイランはまだ午後のお役目があるのですから」

私の雇い主である司祭様がやってきてしまった。いつまで経っても戻らない私たちに業を煮やして探しにきたらしい。

ハチャメチャな双子も、あまり人の話を聞かない騎士団長さんもこの方の言うことならまあまあ従うので、叱られた三人が素直にごめんと謝っていた。

「セイラン、午後のお祈りが終わったらご褒美をあげますから、もう少し頑張ってくださいね」

司祭様は天使のような微笑みを私に向けてくる。こんな聖人代表みたいな顔をしているが、司祭様は人の動かし方と館と鞭むちの使い分けが神的に上手うまい策士である。

聖職者よりも興行主とかのほうが合っているのではと私は内心思っている。

「すみません、戻ります」

基本、みんな良い人なのだ。

だけど全員ものすごく面倒くさいので、先程のようにちょっと席を外して一人になって落ち着きたい衝動に駆られる。

大聖堂に入ると、私のお祈りの儀式を見るために集まっていた人たちに出迎えられる。

「聖女様がいらしたぞ！」

わあっと大歓声があがって、聖女様コールが始まる。

若じょつかん干白目になりながら『あ、遅れてすみません』とぺこぺこしながら大聖堂の真ん中へ向かい、祭壇にあがるとなぜか拍手が上がった。

「ああ、聖女様の奇跡をこの目で見られるなんて……」

「俺、三日前から並んでようやく入れたんだぜ」

ものすごい期待値の高いコメントが後ろから聞こえてきて、もうほんとにやめてくれと思いがらお祈りの儀式を始める。

「……：我らの母たる女神アーセラよ。御手から齎もたらされた恩寵で、形作られたのはこの大地……」  
祝詞を誦のりとんじると、いつものように浄化の光が私の体からあふれ出す。

光は大聖堂全体に広がり、後ろにいる人々にも降り注いだ。

わ——つと歓喜の声が巻き起こり、これが奇跡か！ と泣き出す人とかいて、ホントにどうしてこうなったのかと冷や汗が止まらない。

「聖女様の替え玉役のはずだったのになあ……」

未だに慣れない聖女様扱いに、ついこの間まで貧乏田舎娘として生活していた自分としては、この下にも置かぬ扱いは緊張して気が休まらないのである。皆の歓声を一身に受けながら、私はこうなってしまった事の始まりとその過程を思い出していた。

第一章 『追い詰められている時に囁かれる甘言は大抵詐欺』

うまい話には裏がある。

そんなことは当たり前前で、変な儲け話とか都合のいい話は疑ってかかるべきだ。

そんなことは分かっている。

分かっているけど、裏があるとしてもそれにすぎらずにいられないほど、切羽詰まった状況という時もあるのだ。

「ほ、本当に聖女様の格好をして国を回るだけでいいんですよね？ 生贄いけにえにされたり、口封じに殺されたりしませんか？」

「女神アーセラ様に誓ってそのような非道な行いはしないと断言します。ただし、国中を回り聖地を巡礼するので二、三年は家に帰れないことを覚悟していただく必要があります。途中で辞めることはできません。それでもよろしければ」

「……それで、報酬の半分を前金でいただけるんですよね？ 家族の身の安全も保障してくれる、と……」

「ええ、下の妹さんをよこせと言っていた商人ともこちらで交渉して、二度とそのような話を持ち込めないよう我々が後ろ盾となりますので安心してください」

「そ、そうですか……それが本当なら有難いです……」

「じゃあこちらの契約書に血判けっばんをお願いします」

そう言つて男は完璧なアルカイックスマイルで、小型ナイフを遠慮なく私の指に突き立て血判を押させた。

ああああ契約しちゃったよどうしよう。こんなものすごくいい条件の仕事がノーリスクなんてあるわけないよなあ。でもほかにお金のアテもないしどうしようもないよなあ。

ダラダラと冷や汗を流す私を、目の前の男はお綺麗な顔で悠然と眺めていた。



私の名はセイラン。七人弟妹の長女で、村の教会で小間使い&日雇いシスターとして働いている。

ただの田舎娘の私がどうしてシスターとして勤められているかというところ、私がほんの少しだけ、癒しの力を持っているからである。ギフト鑑定をしてくれたおじいちゃん神父様が、その力を活かして教会で働いてほしいと言って雇ってくれたのだ。

田舎過ぎて本物のシスターが中央から派遣されてこないのです、おじいちゃん神父様が自腹で私を雇ってくれている。癒しの依頼なんてそんなに來ないから、普段は教会の小間使いが本職で、シスター業は必要に応じてやる日雇いなのだ。

癒しの力がある！と私が神父様に認められた時、村の人たちは皆、無くした腕がによつきり生えるとか、死んだ人が生きかえるとかそういうのを期待していたようで、実際私ができるのが、腰痛とか擦り傷が治るといふ程度だと知ると、あからさまにがっかりされた。

あんまり役に立たねえな……と軽く罵られ結構傷ついた。

それでもこの田舎ではまあまあ重宝されるので、私の給料で弟妹と病弱な母を養ってきたのだ。十五歳で長女の私を筆頭に、十四歳の弟、十三歳の妹、そして九歳、八歳、六歳、四歳の弟たちと

いう七人弟妹の大家族である。

ちなみに父親は、真正のクズってやつで、母と子どもをこさえるだけこさえて、母が末の弟を妊娠中に旅芸人の女に一目惚れをして家族を捨てて家出してしまった。

母もなんであんなクズと七人も子どもを作る気になったのか激しく疑問だが、ともかくそういうことで我が家は子だくさん貧乏で、正直食べていくだけで精いっぱいなのである。

それでも稼ぎが少ない時は、明日食べるものが何もない！ という状態に陥るので、私は自分の食べる分を削って弟妹たちに分け与えるしかないのだが、人間何日も食べずにいるとまともに機能しなくなる。

空腹で仕事中にぶっ倒れて働けなくて、またお金に困るという地獄のスパイラルは悪循環もいとこなので、いい加減なんとかしたい。

まあ、それでもすぐ下の弟も来年からは家具職人の家に働きに出ることが決まっていたし、このまま私も健康に働いていられれば、なんとかやっていけると思っていたのだが……。

ある日、悪趣味な成金丸出しといった格好のデブな商人が我が家を訪れ、『オタクの父親が、借金のカタに娘を売ったのでもらいに来た』と、契約書片手に言い出したので、私たちは大混乱に陥ったのだ。

どこぞで生き延びていた父親は、ろくでもないところに借金をしていた。

払えるあてもなく困り切った父親は、苦し紛れなのか知らないが、昔に捨てた家族を思い出したらしく、借金のカタにウチの末娘を差し上げますと提案し、この商人が買うことにしたらしい。

ちなみに私じゃなくて下の妹を指定したのは、父親が家にいた頃から私は働かない父にガンガン説教していたから、生意気で可愛くない姉は売れないと判断して、素直で可愛い下の妹を指名したそう。ほんとにクソだ。

そんな行方知れずの父親が勝手にした契約なんて無効だ！と私たちも抵抗してみせたが、契約書は正式な手続きを踏んで交わされたものだから、借金を払うか妹を売るかのどっちかしかないと言われ、私たち家族は追い詰められてしまった。

お金なんて我が家には全然ないし、だからと言って年端としはも行かない妹を差し出すなんてできるわけがない。

試しに『私じゃダメですか？』と訊きいてみたが、おデブ商人が私を上から下までチラ見して、『ダメ』と一蹴いっしょくされてしまった。失礼だろゴルァと思ったが、今はそんなことを言っている場合ではない。

また一ヶ月後に来るから、その時に妹を差し出すか、借金全額耳をそろえて返すか選べと言っておデブ商人は帰って行った。

どうしようもなくなつて、私は無理を承知でおじいちゃん神父様にお金を貸してもらえないか頼みに行った。

「……というわけで、お金を貸していただけじゃないでしょうか……」

「貸してあげたいのはやまやまなんだけどねえ、見ての通りウチの教会は村の寄付だけで成り立つ

ているから、本当にお金が無いんだよ……すまないねえ……」

本部からお給料すらもらえていないという神父様は、日々の食事も村人からもらった野菜などで賄まかなっている。

断られるまでもなく無理と分かっただけで、こんなことを頼めるのはもうこの人しかいなかった。なぜならクソ親父は村の人々からも金を借りたまま行方をくらませている。後からそのことを知らされ、でも私たちがした借金じゃないのだからと請求はされなかった。そういう経緯があるから、もう村の人に貸してと頼めるはずもない。

「妹が売られるくらいなら私がつて言ったんですけどね。ダメって断られちゃったんで、他に買ってくれそうな人いませんか……神父様、誰か心当たりありませんか？」

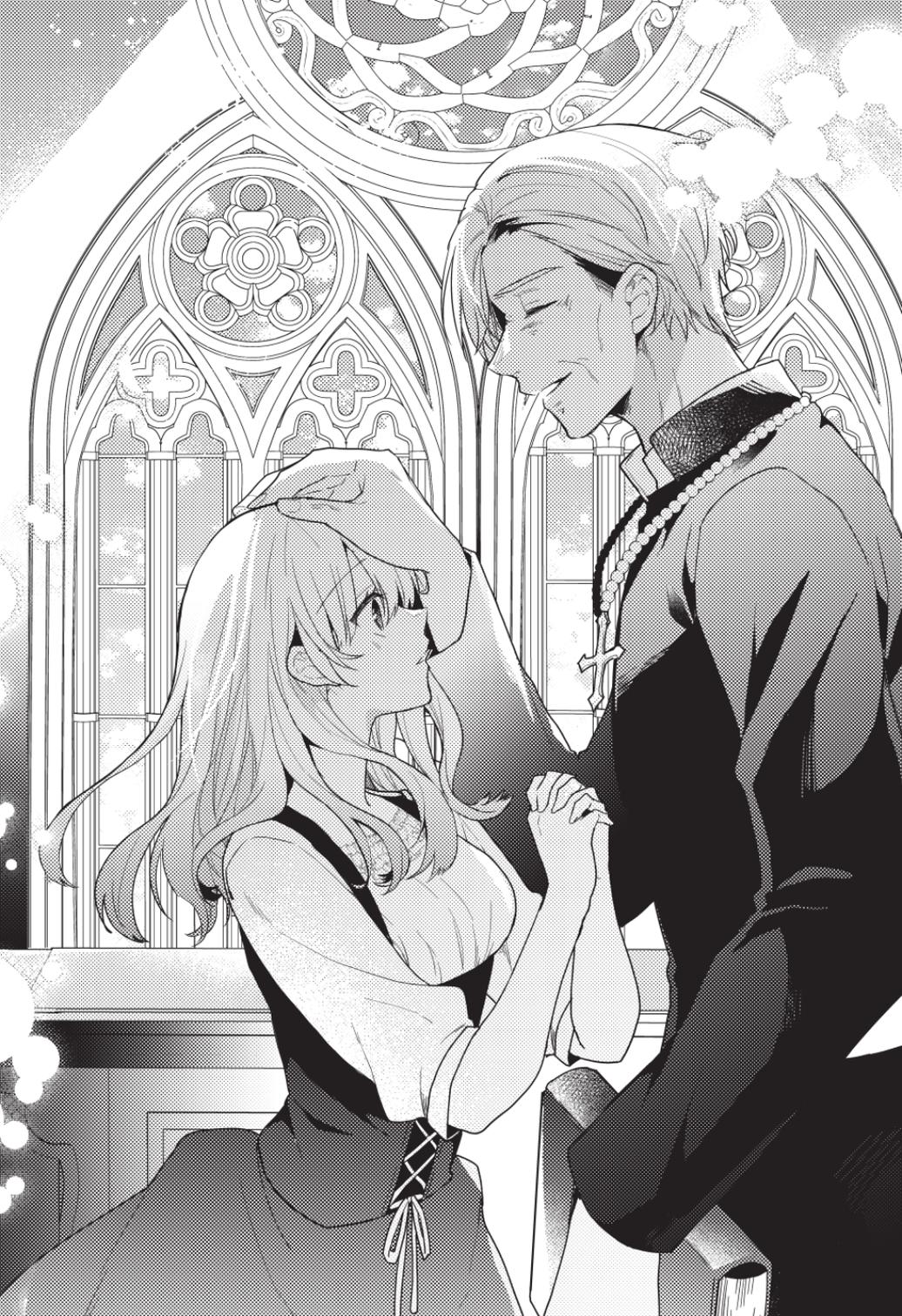
「セイラン、身売りなど……。とはいえ、そうも言っていられない状況だしねえ……」

困ったようになにかブツブツと呟つぶやいていた神父様だったが、何かを決意したように大きく頷うなずいて私にまっすぐ向き合った。

「実はひとつ、破格の仕事があるんだよ。教会総本部で条件に当てはまる人を探しているという話をきいてね、君ならそれに合うから受けてみるかい？ 報酬は、借金を返してもおつりがくるくらいだよ。信頼できるかまだ不安が残るところなんだけど、背に腹は代えられないしねえ」

その仕事を受ければ家族から離れることになるから、本当はその仕事の話は言わないつもりだったと言いながら、神父様は心配そうに私の頭に手を置いて、優しく撫なでてくれた。

「大丈夫ですよ、私もう十五ですし、出稼ぎにでるくらいフツーです」



「そうですね……これもまたお導きでしょう。私にできるのはこれくらいしかないが、せめて祝福を祈りましょう」

神父様はお祈りの姿勢になつて再び私の頭に手を乗せた。

「昼と夜の狭間に落ちた哀れな愛し子に、どうか救いの御手が届きますよう」

神父様が小さく祝詞を唱えると、パツと目の前に光が散つて、目の前が明るくなったように感じた。この神父様は、今でこそ落ちぶれているが、昔は中央にいて結構偉い立場の人だったらしい。

だが、上司の連座で左遷されてここへ流れ着いたというのを聞いたことがある。

理不尽な目に遭つて、極貧生活を強いられている今もお、他人のために幸せを祈れるこの方を私は尊敬している。

「ありがとうございます。どんな仕事か分かりませんが、神父様の紹介なら信頼できるので安心です！」

借金がなんとかかなりそうだと思つて私はニッコニコでお礼を言うと、神父様はものすごく不安そうな顔になった。

この時点でちよつと『ん?』と一抹の不安を覚えたのであった。

それから数日して現れたのが、司祭の衣装をまとつた明らかに身分が高いと思われる、えらく整つた容姿の男性だった。

国の中央にある教会総本部から来たといい、田舎者からしたら雲の上のような存在のお人だった。

この田舎には農民ばかりなので、男と言うのはゴツイじゃがいもみたいな見た目が当たり前と  
思っていた私は、最初この人を見た時に、あまりに肌が美しく手も白魚しろうおのように白く綺麗だったか  
ら、男か女か性別すら分からなかったくらいだ。

そして、この方は一応司祭の階級であるものの、教会本部においてかなりの権力者であり、聖職  
者でありながらお貴族様なのだとおじいちゃん神父様から耳打ちされたので、私は危うく失神しか  
けた。

でも明らかに平民（の最底辺）と分かる私にも、その人は丁寧ていねいな口調で話してくれたので、やっ  
ぱり聖職者はみんな人間ができていなあと心の中で感心していた。

神父様はどうしてこの人を呼んだんだろうか？ この天上人が田舎者にどんなお仕事を斡旋あつせんして  
くれるのか全く想像がつかない。

借金を返してもおつりがくるだろうと神父様は言っていたが、実際提示されたのはとんでもない  
額で、これならクソ親父の借金どころか、末の弟まで全員学校に行かせてやって成人するまで食べ  
るに困らないくらいだった。

なんでこんな好条件の仕事を、わざわざこんな田舎者の小娘に紹介してくれるのかと不信感いっ  
ぱいだったが、どうやらその仕事の条件に当てはまる人物がなかなかなくて困っていたらしい。  
アッシュグレーの髪に青い目で、身長が五尺くらいの若い女性。そしてギフト持ちであることが  
条件だった。

魔力を持って生まれた子は、『女神様からギフトを授かった』と言われる。

属性と強さは人それぞれだが、大して役にも立たないしょほいギフトも含めれば、それほど珍しい存在ではない。

ただ、魔術師になれるほどの魔力量と複数属性を持っている者はほんの一握りで、そういう子はすぐに師団や魔法省からお声がかかるので、この歳までなんのオファーもない私は雑魚ギフト決定なのである。雑魚ギフトでもなんでもいいならいくらでも見つかりそうな気がするが、案外なかなか条件に合う人物が見つからなくて困っていたそう。

そんな時、見た目が合致<sup>がっち</sup>していて、その上に癒しの力という属性としては珍しいギフトを持った私が見つかったので、連絡を受けた司祭様は急いで駆けつけてきたそう。

癒しの力と言ったって子どもだましみたいなモンですよ？　と言ったのだが、それでも条件にびったり当てはまっているらしく、最初に提示された報酬よりも倍出すからあなたがいいとまで言ってくれた。そこまで言ってもらえるなんて有難いなあと、この時の私は純粹に喜んでいた。

だが、美味<sup>おい</sup>しいだけの話などあるわけがないのだ。

切羽詰まった時に近づいて来る人間を信用してはならないと、私はこの時に気付くべきだった。

第二章 『聖女の代役をするだけの簡単なお仕事です』

「私は司祭のルカ・デ・ラ・ロヴェと申します。セイランとお呼びしても？」

「アッ……ハイ。ドウゾ」

中央から来たお偉い司祭様に引き合わせてもらった私は、教会の一室を借りて彼から詳しい仕事内容を説明してもらったことになった。

まあ、要は『聖女様の替え玉』をやるお仕事ってことらしい。うん。だいたい察した。

この国では女神アーセラ信仰が国教とされていて、その女神のお言葉を聞くことができるという聖女が存在している。

聖典の記録によると、この国の原初の時代に、女神の啓示を受けた女性が聖女の始まりだとされている。そして、始まりの聖女が身罷られる際に、『この役目は次の者へ引き継がれる』という言葉を残した。その言葉のとおり、聖女の証となる『しるし』を持った娘が生まれ、それからその力は現在に至るまで、とぎれることなく受け継がれてきた。

私はその話を聖典で読んで知っていたのだが、実際にその姿を見たこともない庶民のあいだでは、聖女様なんてただの教会が作ったマスコットだろという認識だった。

確かに過去の聖女が数々の奇跡を起こしてきたという話は子ども向けの絵本になったりしているが、それは全て昔話のように語られている。

実際のところ、教会の聖女の定義というのは『しるし』を持っているか否かというだけで、特に奇跡を起こすような力を持っているわけではないらしい。

だから今の時代では教会のマスコットという認識でもあながち間違いではないと司祭様は言っていた。教会関係者がそんなこと言っちゃっていいんだろうか。

そして本題だが、今代の聖女、ロザリー様は今年で十五歳におなりになる。ようやく公務に就ける年齢となったので、聖都でのお披露目を終えた後、王様の命令で国中の教会を訪れる予定になつていたのだが……。

「ロザリー聖女様は、世話係の男と恋仲になられましたね。勝手に結婚してしまわれた挙句、このたび新婚旅行と称して国から出奔しゅっほんしてしまったのです」

「なんて？」

なんと聖女様、全ての公務をブツチして新婚旅行に出かけてしまったらしい。

国外逃亡の理由は、王様直々に命令された教会巡礼をやりたくないがため、というこれまたどうしようもない理由を聞かされ、何とも言えない気持ちになる。

教会巡礼は僻地へきちまで馬車で回るので、移動中は野営もやむを得ない。道が整備された聖都と違い、悪路を進むことになるので、馬車での移動はとても快適とはいいがたい。温室育ちの聖女様はその話を聞いた時点で、そんなイヤと完全拒否の姿勢だったようだ。

だが、この役目は王命であるから断ることはできないと理解すると、ある日突然、王様にも内緒で新婚旅行に出かけるという暴挙に出た、と目の前の司祭様はうんざりした様子で語った。

「結婚はどうでもいいのですが、仮にも国教の聖女様が、全ての仕事を放棄して国外逃亡は前代未聞の大不祥事なのです」

「でしょうね……というか、そもそも仕事なんだから放棄しちゃダメなんだよって教会の偉い人とかがちゃんと叱って言い聞かせればよかつたのでは……？」

「もちろん我々は再三に亘<sup>わた</sup>って説得いたしました。ですが、ロザリーエ聖女は王の庇護下にありません。故に聖女は教会よりも自分のほうが立場が上だと思っていて、こちらの意見など雑音程度にしか認識していません」

今の聖女様は王宮で育てられ、正しい聖女教育を受けていないのだそう。

昔は教会の権力が強く、聖女育成は教会で經典に沿って正しく行われていたそうだが、今代の王は旧態依然とした国の在り方を改革していくと称して、聖女様を教会から引き離し、王宮で甘やかして放題で育ててしまった。

あらゆるわがままを許容される環境を与えられた聖女様は、みごとにモンスター級のわがまま子に成長してしまった。王様、とんだモンペである。

「当時、聖女を教会に戻してまともな教育を受けさせるべきと王に直談判した者もいたのですが、そのほとんどが失脚させられました。そのため、現在教会の上層部に王に意見できる者は残っていません」

「アー、うちの神父様もその煽<sup>あお</sup>りを食って田舎に左遷されたみたいな話を聞いたことがあります」  
あの時から教会の在り方は変わってしまった、と神父様が珍しく愚痴<sup>ぐち</sup>を言っていたのでよく覚えてる。

「教会巡礼は、王様から『教会が全責任を持って遂行<sup>すいこう</sup>せよ』と厳命されています。失敗すれば全ての責任を教会が負わされる。今の上層部が責任を取るわけはありませんから、下の者が文字通り首を切られることになるでしょう。これ以上、まともな人材を失ってしまったら、教会はもう機能し

なくなりませす」

というわけで、絶対に失敗したくない教会の方々が、聖女様が逃げちゃったことを隠蔽して、この『聖女様の替え玉で巡礼終わらせちゃおう大作戦☆（私命名）』が決行された結果、私にその役が回ってきてしまったというのが真相である。

もうね、どっから突っ込んだらいいのやら。

つーか聖女様の生活費全般は国民の血税から成り立っているんだから、幼児期から働きっぱなしの私としては、お前もちょっとは仕事しろと声を大にして言いたい。

ていうかそもそも王様が教育を失敗したのに、そのツケを教会に被せるのもひどすぎる話なのだが、更迭が怖くてそれに意見できない教会上層部もだいたい最低だと思う。

と、心の中で偉い人たちの批判をしまくっているうちに、司祭様は当然替え玉の役目を私が引き受けるものとして話を進めている。

「家族と、あなた自身の安全は私が責任をもって保障します。巡礼の期間が延長になる場合もありますが、その時は延長した分の報酬を追加しましょう」

「ええと……やっぱりちょっと考えさせてもらっていいですか？ ヤッパリ家族が反対スルカモナーなんて……」

よくよく聞いてみればこの仕事面倒くさいことになりそうな予感しかしない。普段はあんまり働かない私の危機管理システムがガンガン警鐘を鳴らしている。お金は欲しいが、この仕事は報酬より厄介事のほうが上回る気がして私は逃げ腰になった。

「ああ、ご家族にはもうお話しして快諾かいだくいただいていますよ。借金の元凶であるお父上を捕獲する条件もプラスしましたら、それはもう喜んであなたを送り出してくださるそうで」

「外堀埋める作業早すぎませんか？」

断れないよう家族に手を回してから来やりましたよこの司祭様。聖職者がそんな腹黒い真似をしていいのだろうか。

報酬だけでは断られる可能性を考えていたのだろう。実際その通りで、クソ親父のことまで解決してくれる条件を出されてはもう私に断る選択肢は残されていない。

「分かりました。じゃあ……任期とか契約内容を詳しく……」

私の返答を聞いた司祭様は、売り物にできそうな完璧な笑顔を浮かべて、抜かりなくすぐ各種条件を文書にしたものを差し出してくる。本当に仕事が早くていらっしやる。

条件も報酬も私が断る理由が見つけれられない完璧さであった。

もう何も訊くことがなくなってしまったところで、流れるような手際の良さで契約書が用意され、躊躇ちゅうちよなくナイフを指に突き立てられた。

血判が押された契約書を手にも、司祭様は満足そうな笑みを浮かべ右手を差し出してきた。契約締結の握手である。

ヤケクソでがっちり握手を交わしてやると、司祭様は白魚のような指に似合わない握力で握り返してくれたので、血判で切った指がちよう痛かった。



家族には『出稼ぎに行つてくる』と伝え、もらった前金を渡した。

だが、ちびたちの面倒を病弱な母一人で見られるか心配だった。

「やっぱり私がいらないとお母さんが過勞で倒れちゃうんじゃない……」

「そう思いましたので、乳母の手配を済ませてありますからご心配なく」

「抜かりなさすぎてむしろ怖いです」

とことん先回りして退路を塞いでいくこの人。

生活の憂いが取り払われた家族は、私との別れをまったく惜しむこともなく『いつてらっしゃい！ お仕事頑張つてね！』といい笑顔で送り出してくれた。

出発するその足で、私と司祭様は、おじいちゃん神父様のところへ挨拶に赴いた。

おじいちゃん顔色最悪だけど大丈夫かな？

「セイラン、不運に見舞われても、耐えて時を待つのだよ。今は女神様が夜の刻にあるから、救いの御手を感じられないだろうが、必ず夜は明ける。昼の刻が来れば、女神様はあなたの頑張りに祝福を送ってくださいますよ」

夜の刻、というのは女神様がお眠りになっている時間を指す聖典にある文言<sup>もんごん</sup>なのだが、人々のあいだでは、『運が悪かった』という意味で使われたりする。女神様が寝てるので、人々に目が届か

なくて不運に見舞われるんだからしょうがないよねっていう慰めなぐさの言葉だ。

まあ、そのうちいいことあるから頑張って行ってこいっていうおじいちゃんりのエールらしいんだけど、悪いことが起きる前提で言われても励まされた気がしない。

なんか嫌な予感がするんだよな……。

「ロヴェ殿。セイランをよろしくお願いいたします。彼女はこの教会の……私の光なのです。ですから、大切に守ってやってください」

お、おじいちゃん神父様〜！ 私が使い捨てられないよう司祭様にプレッシャーかけてくれる！ でも多分この腹黒司祭様に泣き落としは通用しなさそうだよ！

「ええ、ほかならぬグラーヴ神父殿からお預かりした方で、大事な聖女様の代役ですからね。巡礼の間、私が責任を持ってお守りします」

にっこりと作り笑顔を浮かべる司祭様。

あれ？ この二人昔からの知り合いだったのかな？ 神父様は逆に渋い顔のまま、念を押すように何かを伝えていた。ちゃんと私に三食ご飯を与えるようにと釘を刺してくれると有難い。

なんだか非常に温度差のある別れの挨拶を交わして、私は司祭様と共に教会を後にした。

少し歩いて、村から出ようとしたあたりでふと司祭様が私に話しかけてきた。

「セイランはあの方とどういう関係なのですか？ あなたは正式なシスターでもないですよね？」

「はあ、ただの雑用係兼日雇いシスターです。ウチが生活に困窮こんきやうしているから、お情けで雇って

いただいているだけですけど」

「……その割には、随分と信頼関係があるようで」

「それは私が神父様を尊敬しているからじゃないですか？ 立派な方なんですよ。私より貧乏なのにお給料くれるし、己の境遇に不満とか一度も口にしないすごい人なんです。神父様がいたから、私もひねくれずに生きてこられたんで、恩人みたいなもんです」

「そうですか……」

私もし神父様の立場だったら、理不尽だと叫びたくなりそうなのに、女神様がお導きくださったのだと言つて感謝しか口にしない。そんな人が身近にいたら、私も自分の境遇を呪うような真似はできなかつた。

私の返答を聞いた司祭様は、何かを考えているようだった。

神父様も昔は中央にいたというから、元々知り合いだったのかな？ その頃のこととか聞かせてもらえないかと思つたが、馬に乗せられた途端、全力で走り始めたので、口を開けば舌を噛む有様で喋るところではなくなつてしまつた。

時間がないと言つて馬を急がせた司祭様は、聖都ではなくすでに出発している巡礼隊と合流すると教えてくれた。

てつきり私は、中央の聖都から送り出されて巡礼に行くところから替え玉の仕事が始めるのかなと思つていたら、すでにそれは本物の聖女様が済ませていると聞いて、今日何度目か分からない『馬鹿なの？』と心の中で叫んだ。

ロザリー様は華々しいイベントが大好きだから、出発のパレードだけやると言って、ゴッテゴテの聖女コスチュームで山車だしに乗って聖都を三周もしたらしい。どうでもいい聖女様情報だけが増えていく。そして、急がなきゃいけないのは分かるが、乗馬初心者いたの私を全く労わらない走らせ方をしてくれるので、私の尻が死んだ。

予定の合流地点に近づいたところで、ようやく一旦休憩を入れてもらえて、合流する前に頭巾ずきんを被せられた。

「あなたが替え玉というのは、他の巡礼についてくる護衛の者たちには知らせていません。ロザリー様は普段、常にヴェールでお顔を隠していらつしやるので、本当に近い者以外、聖女様の素顔を知りません。ですからあなたがニセモノだと気付かれる可能性はほとんどないと思いますが……念のため、普段はこうして額帯がぶたいで目元を隠しておいてください」

聖女様がヴェールを被っているのは、聖女様のご尊顔はお美しすぎるそうで、お顔を拝謁はいえつするのはご褒美だから普段は出し惜しんでいるらしい。なんだそれ。

私は司祭様にもらった修道服に着替えていたが、修道女の頭巾とかヴェールは額帯の部分が少し加工されていて、目元がしっかりと隠れる形状になっていた。

「私はずっと黙っていて大丈夫ですか？ 私、聖女様らしい話し方とか分からないんで、ちょっとでも口をきけばばれちゃうと思うんです」

「大丈夫ですよ、ロザリー様は口がお悪くいらつしやったから、少々口調が荒くても誰も不審に思いません」

「はあ、そうですか……って、聖女様なのにどうやったらい口が悪く育つんですか。下町にでも放り込まれたんですか」

「ああ、性格が悪いんで口も悪く聞こえるんですよ。まあとにかく大丈夫ですから」

この人、聖女様のこと大嫌いだよね。

「あ、ホラ、本隊に合流しますよ」

くだらない聖女様情報を聞き流していると、いつのまにか目的地にまで来ていたらしい。遠目に国旗を掲げた一団が見えた。

鎧姿の騎士が十名ほど、その先頭にひときわ体の大きな赤髪の騎士で、一番偉そうな紋章つけた人。その左隣には魔術師の衣装をまとった少年が二人、不機嫌そうな顔で立っていた。オーバーサイズの魔術師ローブが可愛いこの少年二人は、瞳の色は紫と緑でそれぞれ違うけど顔がそっくりなので双子のようだ。

ん？ 本隊これだけ？ 少なくね？ 見た限り女性が一人もおらんんだけど、フツー聖女様のお世話係とかで侍女さんとかもいるはずだよね？ イヤ別にお世話されたいわけじゃないが、一応設定的にさ。

私は司祭様に『ほかに？』と訊いてみたが、以上のメンバーが巡礼隊だと言われ哑然とした。

ロザリーエ様は女の子だよ？ フツー侍女さんやお付きの乳母さんとか同行するんじゃないんですか？ 男しかいないんだけど、しかも少数精鋭なのか知らんが国家行事だというのにこの人数ってどうなの？ 通りすがりでこの厳つさしかないご一行見かけても『魔物討伐隊かしら？』と

しか思わないよ？ 私がびっくりして固まっていると、司祭様がこそっと耳打ちしてきた。

「ロザリーエ様のお気に入りの者は全て新婚旅行に連れて行ってしまったので、侍女なども本隊には残っていないのです」

はあ、ソウデスカ。じゃあまさかこのメンバー、聖女様と仲の悪い人たちの集まりとかじゃないよね？

「あーやつと聖女様捕まえてきたんだ。おっそいよルカ様。もうさ、新婚旅行とかばっかじゃないの？ 国の税金で食べてんだから、まずは働けつっの」

「聖女様だけ？ あの頭の悪い取り巻き連中は置いてきたの？ まあゴチャゴチャうるさいだけで役に立たない奴らばっかだから居ないほうがいいか。ねえ、もう首輪でもつけとこうよ。逃げないようにさ」

かわい顔した双子がしゃべりだしたと思ったら口の悪さが半端ない。そしてやつぱり仲悪いメンバーじゃないですかーヤダー。

赤髪の偉そうな騎士さんは無言で私を睨にらんでいるだけだけど、なんか人でも殺しそうな顔しているのだから不穏極まりない。

「すみません、捕獲に手間取りました。ですが聖女様も心を入れ替えて公務いそに勤しむと約束してくれたので、もう心配ありませんよ。ファリルもウィルもあまり不敬なことを口にしないように。誰が聞いているか分からないですからね」

「ほーん」



あらまあ司祭様のお言葉にはいいお返事ですわ双子ちゃん。

どうでもいいけど、双子ちゃんの名前はファリルとウィルなんだね。覚えておこう。

そして司祭様が『すぐに出発しましょう』と言って、私に停めてある馬車に乗るよう促した。

なんか特別仕様の牢獄みたいな箱馬車。外側から鍵がかかるようになっていて、おかしいよね？

え？ ホントにこれに乗るの？ 一応、聖女様の巡礼って触れ込みで各地を回るんだよね？ どう見ても罪人の移送用じゃない？

これに乗ったら断頭台に連れていかれるんじゃないかと不安になったので、乗るのをためらっていると、赤髪の偉そうな騎士さんがボソッと、

「足の腱を切ればもう逃げられないよな……」

とこれまた不穏極まりない言葉を発したので、光の速さで馬車に飛び乗った。

後から典雅な所作で司祭様が乗り込んでこられたので、この状況はどういうことかと恨みを込めて司祭様を睨んだが、にっこりと破壊力抜群のキラキラスマイルで返されて終わりだった。

ただ、『騎士団長、言葉を選んでくださいね』と一応ちっちゃく注意していたけど、注意の仕方が間違ってる。つーかあの人、騎士団長だったのか。ちよう偉い人なのに不穏がすぎる。

『ガチャン』と明らかに鍵のかかる音がして、馬車はちゃかばこと軽快な音を立てて動き出した。

ていうか司祭様も一緒に閉じ込められているけど、いいのかしらと思った。けれど、雇われのニセモノごときが口を利くのはばかられたので、黙ったままおとなしく椅子に座っていた。

しばらく司祭様も黙って馬車に揺られていたが、なんだか司祭様から視線を感じて落ち着かない。なんならちよつと不躰ふしつけすぎじゃないかと思うほど見られている気がする。

「……………」

「……………」

心を無にして気付かないふりをしていたら、司祭様のほうから話しかけてきた。

「……そういえば彼らの名を伝えるのを忘れていましたね。先ほどの赤い髪の男が、騎士団長のダレン・ロンハイム。双子の少年らが、魔術師で、紫の瞳がファリル、緑の瞳のほうがウィルです。彼らはまだ十歳の少年ですが、国内で五本の指に入る能力者ですよ。他の騎士たちをあわせても二十人に満たないですが、あの三人が居れば安全です」

「はあ、ソウデスカ」

どうにも聖女様って嫌われているようだけど、守ってもらえるのかしらと思ったが、訊いたところで解決しそうにもないし、訊くだけ無駄なので黙っておくことにした。

さすがに死なない程度には守ってくれるだろう。それに国内の教会をめぐるだけなんだから、いくらなんでも命の危機はないよね。

どうせなにか意見する権利が私にあるわけじゃなし、黙っておくのが得策だ。私は馬車のなかですることもないのでぼんやりと窓の外を眺めることにした。嗚呼ああ、空が青い。

そうやって焦点の合わない目で現実逃避していると、また司祭様が話しかけてきた。

「あなたは肝が据わっているというか、変わっていますね。なにも訊いてこない上に、私のほうを

見ようともしない」

「ええまあ、仕事ですし、引き受けた以上は文句を言っても始まらないですからね。それに私、人見知りなんで、友達でもない司祭様と会話を楽しむほどのコミュ力がないんですよ。あ、気を遣って話しかけていただかなくても大丈夫です。私のことは路傍ろぼうの石だとも思っていただければ」

「……女性に話しかけるなど言われたのは初めてですね。常日頃、女性信者の方々は私にしつこくらしい話しかけてきますから、ご婦人というのは皆かしま姦しい生き物なのだと思います」

「ひとそれぞれってやつですね」

「あなたは私の顔を見て、どう思われますか？」

なぜか司祭様が会話を終わらせてくれない。

雑談とか苦手なのよね。連絡事項だけでいいのに。あ？ でもこれも仕事の一環なの？ 人の質問にどう答える的な練習？

司祭様の顔を見てどう思うかと言われても……なんというか……。

「肌ツヤもよく健康体にみえます。歯並びもよいです。目鼻立ちもほぼ左右対称で、良いお血筋なのでしようね。身長も高く手足も長くていらつしやる。幼い頃から十分な食事を与えられて栄養が行き届いた結果でしょうから羨うらやましいです。子どもの頃、栄養が足りていないと低身長になりますから、私の村では大柄な人は少ないのですよ」

私ももう少し満足に食事がとれていれば、もうちよつと身長が伸びたはずなのに……と若干恨みがましい気持ちにじみ出て、余計なことまでしゃべってしまった。

司祭様は私の返答が思ってたのと違ったのか、きよとんとした後、爆笑した。

わあ……こういう整った顔の人が爆笑するとちょっと狂気じみているように見えるのは私の偏見だけ……正直怖い。

「はははっ！ 健康体ですか！ 女性にはこの顔が好まれるようで、たいてい初対面から顔の造形について褒められることが多いですが、顔が左右対称だと言われたのは初めてです。面白い表現ですね。ですが、血筋と左右対称は関係あるんですか？」

「血筋というと語弊があるかもしれませんが、生まれつき丈夫な子どもは、体のバランスがいいんですよ。手足の長さが揃っているとか、背中が歪んでいないとか。左右対称であるのは健康な証に見えると思いますよ。そして、健康な人の子どもはその良い特性を受け継いで生まれてくると考えると、女性が左右対称の優れた容姿の男性を好むのは、そういう理由があるからじゃないですか？ ホラ、子どもは育ちにくいものですし。私の村でも、子どもが生まれても半数は五歳前に死んでしまうなどザラですから、健康で強い子どもを産みたいと女性が思うのは当然だと思います」  
私は話しながら過去のことを思い返していた。私には弟妹がたくさんいるが、本当ならもつと人数が多かったはずなのだ。

私にも兄や姉がいたのだが、私が物心つく前に病氣や怪我が原因で亡くなっていた。

強い子だけが生き残り、生まれつき体が弱い子はどうしたって淘汰される。私が癒しの力が使えることが分かってからは、母や弟妹たちのちよつとした不調なら治せていたので、私より下の子の生存率は格段に上がったと思う。

……つと、いけない。余計な話までしてしまった。姦しいと言われる前に口を噤もう。

司祭様といえ、ばちばちと瞬まばたきをしたあと、さらに私をガン見してきた。

「ふうん……環境が違えば物の見方も変わりますね……興味深い意見です。あなたの目線で見ると私とは全く違うものが見えてきそう。面白いですね。それに、あなたが私にかけらも興味がないことがよく分かりました」

「興味……？ いや、どうでもいいとかではなく、司祭様に関してなにも知りませんからなんとも申し上げられず……」

「ああ、私のことはどうぞルカと呼んでください。かわりに私もあなたをセイランと呼ばせていただきますし。もちろん皆の前では呼びませんよ？ ちゃんと聖女様とお呼びしますからご心配なく」

「心配……？ いや、別に使い分けとかそんな面倒なことしなくても、ずっと役割名で呼んでいただければ……」

「いえ、セイランとはもつと友人のように色々な話をしたいと思っっている、二人の時はそんな他人行儀にならないでください」

そんな必要ある……？ と言いかけたが、司祭様の笑顔がなぜかものすごく怖かったので、慌てて口を噤んだ。

司祭様のニッコリ顔って悪い顔に見えるのは何故なぜなんだろう？

もしかして怒ってらっしゃる？ 私がペラペラ調子に乗ってしゃべったから癪かに障ったのかもし

れない。口は災いの元だ。もう下手なことはしゃべらず『ハイ』か『イイエ』でだけで乗り切ろう。

「神父殿に、『私の光』と言わしめるあなたのことを、もっと知りたいと思っていたんです」

……アツ、神父様の気遣いがこんな弊害をもたらすとは予想外でした。

「いやその、私はただの田舎娘ですから、司祭様を楽しませるような面白エピソードとか持ち合わせていないので……」

「全く違う価値観に触れるのは面白いものだと、先ほどあなたに教えてもらったばかりですよ」

それから司祭様は、ド田舎の貧乏生活の何が面白いのか知らないが、家族のことや普段の仕事内容など、私の個人的なことを根掘り葉掘り聞いてくるので、プライバシーって言葉知ってますかとツッコミたくなる。

喜んで人に語りたくないような人生ではないので、適当に誤魔化そうとするが、具体的な回答が得られるまでぐいぐい話しかけてくる。仕方なくハイカイイエくらいの最低限の単語で返答していたが、そうすると圧強めで質問責めにされる。もう勘弁して。

長時間馬車に揺られる疲れとかよりよっぽど司祭様の質問攻撃のほうがきつかった。

ついに私のモーニングルーティーンとかまで話が及びメンタルが死にかけた頃、最初の目的地である領地に到着したと赤髪騎士団長さんが馬車の外から伝えてきた。

「さ、セイラン。あなたの聖女代役としての初仕事です。今日の流れはちゃんと覚えていますか？」

「はい、まずは教会で祈りを捧げて、そのあと領内を回って奉仕活動ですよ？ 奉仕って言うって

も領民に挨拶して回って握手とかすればいいだけですよね？ 他にやることないですよね？」

「ええ、あとせっかくなので、癒しを求められたら応じてくださってもいいですよ。でも無理はしないでください。できる人数だけで結構です」

「はあ、でも私の癒し効果ってほんとしよほいですよ？ 膝擦りむいたのとか二日酔いとか治せる程度なんで、応じたらしよほさが露呈あつてするんですがいいんですか？」

司祭様は私の言葉を聞いてちよつと不思議そうに首をかしげたが、すぐに『それで十分だ』と言われたので安請け合した。

「奉仕活動は印象操作のためのパフォーマンスみたいなものですからね。もったいぶって癒しをかけて、実績だけ残せば十分です」

適当な返答に不安しかないが、もったいぶられると有難い気がしてきちやうのはちよつと分かる。馬車の扉が開けられると、目の前に騎士団長さんが仁王立ちしていた。

「おい、ルカ。準備に向かった双子が礼拝堂で神父と揉めてるぞ。早く仲裁に行つてやれよ」  
「ウィルとファリルが？ 仕方ないですね、すみません聖女様。礼拝の準備が整うまで少々お待ちください」

そう言つて司祭様は礼拝堂へと駆けて行つた。残された私は、馬車の中に閉じ込められて息がつまっていたので、外に出て時間を潰すか……などと考えていると、私を睨みつける騎士団長さんと目が合った。

なんだろ？ と思いながら、馬車から降りるために足を踏み出した瞬間、足元に置いてある踏み

台を騎士団長さんが蹴り飛ばした。

「っと、あぶなっ！」

台に乗り損ねた私は危うく転げ落ちそうになるが、なんとか手すりを掴んでギリギリ持ちこたえた。それを見た騎士団長さんがチッと舌打ちをしたので、私を転ばせようとわざとやったことだと分かってつい睨み返した。

「あすみませんね。聖女様はいつも俺を踏み台になさるので、気を利かせてどけて差し上げたんですよ。ホラ、いつものようにひざまず跪けとご命令されたらどうですか？ 靴のヒールで俺の背中をえぐるのがお好みでしたよね」

……いや、待って。なんかとんでもないエピソードを披露された気がする。え？ 聖女様はDSなの？ サイコパスなの？ そういう性癖なの？

「……黙ってないで何か言ったらどうです？ それとも取り巻き連中がそばにいないと怖くて何も言えないのか？ そうだよなア、ここにはお前を守ってくれる奴は一人もいないからな！ 残念だったな、せいぜい自分の行いを悔いて震えている！」

目力だけで二、三人殺せそうな眼差しを向けられるが、なんと返答したらいいものか分からず黙っていた。だつて詳しい事情知らんし……。

私が何も言わずにいると、騎士団長さんはひとつため息をついて殺気を収めた。

「……まあいい。聖女様には働いてもらわなきゃならんからな。命まではとらないでいてやるよ」  
そう言つて騎士団長さんは背を向けて歩き出したので、ようやく私は馬車から降りることができ

た。はあ、疲れた。

周囲を見回してみると、他の騎士さんたちも遠巻きにしながら皆こちらを睨んでいるし、少し離れたところで様子を窺<sup>うかが</sup>っている村人さんたちも嫌な顔をしている。

先が思いやられるなーとため息をついていると、視界の端で何かが飛んでくるのが見えた。

と、次の瞬間、『グシャッ！』という音を立てて何か固いものが私の頭にヒットして、その後べちゃあ……と粘性の高いなにかが垂れる感覚がした。

突然のことに茫然としてみると、騎士団長さんを含むその場にいる全員がドッと笑い出した。

「熱烈な歓迎を受けたみてえだなあ！ 生卵のシャワーたあ、ここの領民も気が利いてるぜ。ああ、こんな屈辱受けたことないよなア。さー、どうする聖女様よ。泣いて逃げ出すかア？」

生卵……。ああ、なるほど。生卵を投げつけられたのか。

卵が飛んできた方向を見ると、籠<sup>かご</sup>を持った少年二人が卵片手に爆笑していた。

そしてまた振りかぶって卵を投げるしぐさをしてきたので、それをみた瞬間、私はプチ切れた。

「ごるあああああああ！ コンのクソガキがあああああああああ！」

雄叫<sup>おたけ</sup>びを上げて私はその少年二人を猛ダッシュで追いかけて、両腕ラリアットをかまして素早く捕獲した。少年らはまさか聖女が宙を舞ってラリアットしてくるとは思わなかったようで、地面に引き倒され茫然としている。

私はキャッチした卵の籠をそつと地面に置いてから、二人に拳骨<sup>げんこつ</sup>を落とす。

「ぎゃっ！」

「いてえ！ なにすんだよ！ 聖女様が子どもをなぐっていいのかよ！」

「お前からこそなにやったか分かってんの!? 卵を人に投げつけるなんて何考えてんだ！」

「へっ。また投げつけられたくなかつたらさっさと俺たちの村から出ていけよ。次は生ゴミのほうがいいかあ？」

一人はビビッて黙っていたが、正気に戻った強気な少年が皮肉たっぷりに言い返してくる。全然反省していない様子に私の怒りは頂点に達した。

「……今日び卵がひとついくらすると思ってるの？ お前らは食べ物おもちゃにすんなって教わらなかったの？ うっかり落としたならともかく、嫌がらせのために貴重な卵を無駄にするなんて馬鹿の極みだよ！」

凄まじい勢いで捲まくし立てる私に、少年たちは啞然として言葉を失っている。後ろのほうから、『えっ……』とか『ちよっ……』とか戸惑う声が聞こえ、オロオロする騎士団長さんとその仲間たちが見えたような気がしたが、荒ぶる私は卵のことしか頭になかった。

「卵は完全栄養食品なんだよ！ 栄養豊富！ 毎日一個食べられたらどんだけ幸せか！ じゃなかった、健康になれるか知らないのか！ お前！ 今すぐ謝れ！ 卵を産んでくれた雌めんどり鶏に、『あなたの卵をゴミにして大変申し訳ございませんでした』って頭を地面にこすりつけて許しを請え！ 鶏が許しても私は許さんけどな！ そして雌鶏が卵を産めるよう毎日餌をあげて世話をしている全養鶏家にも謝罪をして回れエエ！」

食べ物が無駄にするのも許せない行為だったが、なにより卵をこんな使い方をしたのが許せな

かった。卵は栄養価が高いので、弟妹たちにできれば毎日食べさせてやりたいと思っていたが、い  
かんせん高いので毎日食事に出すなど我が家の経済状況ではまず無理だった。

下の妹が長引く風邪でげっそり痩せてしまった時に、卵をたくさん食べさせてやれたらなあ、と  
か、ゆで卵を一人で丸々食べたけれど弟妹みんなで分け合うからいつもちよびっただけだったと  
か、貧乏を悔しく思った気持ちとかがぶわあッと湧き上がってきて、少年のしたことがどうしても  
許せなくて、投げ捨てるくらいなら私にくれと恨みを込めながら襟首掴んでがくがくと振り回して  
やった。

少年らは私の剣幕に完全にビビり、涙と鼻水を垂らしながら『ごめんなさ……！ ごめんなさ  
いいい！』と泣き叫んでいる。

「ど、どうしちゃったんだ聖女様は。暴れ馬みたいになってるぞ」

「すげえ怒ってますよ……と、止めたほうがいいんじゃないですかね」

「誰かあの子ら助けにいけよ……」

「お、俺は嫌だぞ……囃まれそうだし」

後ろのほうから聞こえる騎士さんたちの失礼なひそひそ話が耳に届き、その辺でようやく私も  
ハッと我に返った。

顔をあげてみると、赤髪騎士団長さんとその仲間たちが完全にやばい人を見る目で私を見ていた。  
あ、これ完全にヤッチマッタやつですよ。

「……と、えーっと、食べ物は大事にしましょうというのが女神の教えですからね……よく覚

えておいてねー。じゃーもう卵投げちゃダメだよーじゃなかった、ですわよー？ オホオホホ」

いやもう第一村人との遭遇から聖女様の印象最悪じゃん。もうこの村での巡礼失敗確定じゃん。子ども泣かせた極悪人じゃん。

さっきの騎士団長さんの態度からすると、命はとらなくてもぶん殴るくらいはするかもしれない。ヤッチマッタと冷や汗をかいていると、仲間たちとヒソヒソしていた赤髪騎士団長さんが、意を決したようにズカズカと私に近づいてきた。

殴られるかなー。クソ親父は割と手が出るタイプだったから慣れているけど、あんな筋肉ダルマにぶつ飛ばされたら歯ぐらい折れるかもしれない。歯は大事だから困るなあと考えながら見上げてみると、騎士団長さんが気まずそうに口を開いた。

「あー、あのな……その……あんたの言う通りだ、すまん。この子どもたちが卵を投げようとしているのに気付いていたんだが……いい気味だと思って……黙認したんだ。だけど食べ物粗末にする行為は止めるべきだった。俺からもこの子らに注意するから、どうか矛ほこを収めてくれないか？」意外なことに騎士団長さんは怒った私を諫めるために謝罪をしてきた。多分私がブチ切れていたから、子どもたちの安全を優先したのだろう。この人、案外理性的なのかもしれない。

「え？ あ、まーそうですね。しっかしこの子らも投げるならなんでゆで卵にしなかったんでしょうね。ゆで卵だったらぶつかっても食べられるから無駄にならずに済んだのに勿体もったいない……。まあ騎士団長さんもあれが生か茹ゆでかぶつかるまで分からないですもんね。しょうがないですよ」

「生か、茹ゆで……??」

「ええ、茹でなら……」

「[[[……? ……? ……?]]」

一瞬の間があつてから、騎士団長さんと、それまで遠巻きに見ていた騎士さんたちが地面を揺らす勢いで爆笑しました。

「おつ、お前……！ 大事なところココ？ ゆで卵ならいいのかよ！ 論点おかしくねえ？」

「生卵にまみれながら言うセリフじゃねえぞ！」

「ゆで卵なら落ちたのでも食うのかよ聖女様は！」

ゲラゲラと腹を抱えて、なんなら地面に転げて笑う騎士ども。おい、その若いのに、人を指さすんじゃない。

なにかそれほどまでに笑う要素があつたか理解に苦しむが、まあ場が和なんだので良しとするか。どうでもいいが、卵が垂れてきてべちよべちよする。ヴェールの下を摘つまんで服まで垂れないようにしているのと、その動作に気付いた騎士団長さんが声をかけてきた。

「あ、卵が髪に張り付いて取れなくなる前に、そのヴェール早く脱いだほうがいいぞ」

と、言うが早いかヴェールを掴んで引つ張り上げてしまった。あつと思う間もなく、クリアになった視界からしつかりバツチリ騎士団長さんと目が合ってしまった。

「……………え？」

騎士団長さんは私の顔を凝視したまま固まってしまった。

なんで驚いているんだろう？ まさかニセモノだつてバレたのか？